

木下花

七月号

木下花
昭和二十五年三月二十七日
明治三十七年三月二十七日
平成十九年七月一日発行(第百一十七号)



俳句随想〔三百一〕

汀子

もしこの句を完全な文章にするとすれば、「古池に蛙とびこむ水の音聞こゆ」とでもしなければならぬ。しかし今は俳句について論じているのであるから、俳句らしくするために「聞こゆ」という述語は暗黙の了解の下に省略することは許されるだろう。これを原句と比較して考えてみよう。

「古池に蛙とびこむ水の音」

「古池や蛙とびこむ水の音」

どちらも俳句として立派に成立する。では両者はどこが違うのだろうか。前者の意味は明確である。曖昧な点はいささかもなく、この一連の言葉が指し示すのはたった一つの意味だけである。これを俳句として見れば単純すぎて余韻のふくらみが無いと言わなければならない。

それに比べ後者はどうであろう。読者は先ず言葉の縦軸（統辞の軸）に沿って継時的に意味を読み解こうとする。しかし「古池や」と、言葉の連続性がここで絶たれてしまうと、意味を追う頭の働きが停止せざるを得ないのである。そうすると替りに、今迄潜在していた言葉の横軸（連想軸）が生き生きと働きますのである。

旬日記 汀子

平成十八年七月一日 芦屋ホトギス会

白靴の汚れはじめし旅疲れ
青空も虹を彩るものとして
花合飲の蜜吸ふ虫の寄るところ
梅雨明けてゐるかゝる祈りあり

七月三日 下甸旬会
風知草風強き日も弱き口も
日本間は何も置かざる夏座敷
まだ冷えてをらぬ麦茶に客集ふ
まとまりし話メモして麦茶かな
いつも見てをりしがそれと風知草

七月三日 ロイヤル俳壇
計画は綿密にして露涼し
信じたとき人の心や露涼し
旅人に何もてなさん露涼し
運転の時だけ使ふサンングラス
一瞬の水の命を滝として

七月八日 東北ホトギス俳句大会前日旬会 福島
立葵咲かせ似た町つゞく旅
皆汗の邂逅となる旅路かな
涼風といふ一息のつけるもの

七月九日 東北ホトギス俳句大会
水涼し昔謀議のありし場所
万緑の色を譲へて御薬園
名園といふ順路あり露涼し

七月十一日 大阪倶楽部
晴れてゐて雷雲油断なかりけり
一汗ですまぬ旅程にいどみけり
合飲の花旅の消息聞くとたびに

汗拭いてくすり茶を飲む列につく
旅路あり合飲の花咲く頃なれば
なつかしき六甲山のはたがみ

七月十一日 綿業倶楽部
虹立ちてぬしこと知らぬ人もゐて
大げさに立ちこぬしを告げに来し
運転のバックミラーにとらふ虹
夕虹といふすぐ消えてしまふもの

七月十三日 清交社
生きのびし金魚一匹だけの池
網戸より山気とどむるすべのなし
星を見る旅の近づく半夏生
生きのびし金魚やうやく馴染む池

直線に泳ぐことなき金魚玉
マンションの八階網戸なき暮し
七月十四日 工業倶楽部
見つづけてをらねば虹の消えさうに
片寄せてゐる虹の空ありにけり

七分の虹全景へ至りけり
七月十五日 石見ホトギス俳句大会前日旬会
露涼し迷ひ来しこともう忘れ
星を恋ひ涼しき三瓶泊りかな
道迷ふことよからずや合飲の花

七月十六日 石見ホトギス俳句大会
かりそめの日射も雨も山の秋
草原に散りし人呑み大夕立
旅名残 朝涼といふ山の風

七月十七日 摩耶山俳句大会
簡単な梅雨の防備は役立たず
梅雨霧のあなどり難くカーブ切る
七月十八日 有恒倶楽部
富士雪解する刻々のありにけり
この泉掬べば消ゆる旅疲れ

七月十八日 無名会
夕立の待つてくれざること山

ただ濡れてしまひしことも山夕立
見てをりし夕立はいさぎよかりけり
客のある日は開けておく夏館
野を駆けて視界の失せし夕立かな
山の風海の風合ふ夏館

七月十九日 夏潮旬会
長旅を終へし家路や夏夕べ
運転の視界に入り来たる虹
茂る庭少し切り込み客設
梅雨の庭にそれらしくある手入れ

あや芒青々として凛として
鳥の巢外したるより風通ふ
冷酒酌み交はず一人は禁酒かな
七月二十日 野分会夏行
梅雨愛しとせせ集ひ来し人ばかり

七月二十三日 野分会夏行二日目
さりながら五月雨傘はいつも手に
若き歩に離れて一歩づつ滝へ
水音と別に五月雨傘の音

七月二十四日 アサヒカルチャー
梅雨明けして仕事に弾みつきにけり
一息のつく暇のなし旅の汗
七月二十七日 きざらぎ会
梅雨雲を払ひし富士を見て着きぬ

旅終へて又旅支度朝曇
餌を撒きて金魚の元氣確かむる
線返すことなかりけり金魚の死
富士見えて梅雨明けしこと疑はず

七月二十八日 時雨旬会
引上げし客の浴衣のまるめあり
船虫の散る早さ又散る早さ
驚きぬ船虫怖くなけれど
七月三十日 「さわらび」七百号
祝ぎ心抱き集ふる涼しさよ
さわらびを祝ふ心の涼しさよ

廣太郎句帳

廣太郎

平成十八年七月四日 一水会

君待てりアイスクリーム食べながら

七月六日 蕉心会

梅雨空に無念阪神タイガース

水無月の水位大川譲らざる

白南風に蕉翁裾を靡かせて

石段の一步一步といふ暑さ

扇持ち人に見せられない角度

川を見る二人身長差の涼し

あなたこそ似合ふ玉虫ペンダント

七月八日 東北ホトギス俳句大会

行々子鳴いて湖畔を引き寄せし

通し鴨心地の池を筆順に

池を見る角度に端居心かな

七月十日 朝日カルチャー若草句会

青芒砲声響く富士裾野

端居して地球の自転確とあり

夕端居星増えてゆく仔細かな

湿原は人を拒みて青芒

七月十三日 土筆会

妻の柵子の柵のあり冷蔵庫

草いきれ山の怒りのごとくあり

骨切りの音に旨さを秘めし鱧

鱧の出でより雅なる古都の宴

あのワイン確か冷蔵庫の中に

草いきれ風が攫つてゆきにけり

草いきれ鞆の中にまで入れり

七月十四日 浜田吟行

炎天を回すからくり時計かな

石垣の肌を涼しさありにけり

鳶の笛まで草いきれ届きさう

打水といふもてなしの句座であり

七月十五十六日 石見ホトギス俳句大会

漁火に北斗涼しく語りかけ

下向いて歩く人は蛇嫌やから

句碑を見る涼しき距離を保ちつつ

漆黒に白服といふ道しるべ

七月十八日 草木瓜会

空青く富士赤く山開かな

山開祝詞は風に消されがち

竹煮草抜けて老柳山荘へ

山開いよよ靴音高鳴りぬ

七月二十日 登高会

鉾町に空近づいて来りけり

愛犬も首を傾げてサングラス

食細くなる子ならぬ子トマト熟れ

高原のトマト朝から丸かじり

鉾の稚児せしと長老語りだす

七月二十五日 若水句会

香水の一滴でいちころの僕

香水や銀座の地下に吸ひ込まれ

月涼し今日も帰宅は午前様

兜虫木肌に道のあるごとく

移転の日決まりビル街月涼し

七月二十六日 目黒学園句会

美しき過去絵日傘にをさめけり

君と僕だけの世界や砂日傘

この指環夜店で買うたんとちやふで

絵日傘の万華鏡めく交差点

黒日傘さして白づくめの女

七月二十九日 日本伝統俳句協会埼玉県部会吟行会

道細くなりゆく先に滝太し

滝となる水地に還る水であり

紫陽花の鞠を崩して対向車

梅雨の蝶遠ざけ誰かさんの句碑

滝に腹出して秩父の子でありし

雑詠

廣太郎 選

軒陰に來し雪片の親しさよ 長岡 石田遊水
 舞ひ上りたき雪片は窓に來る 同
 軒裏は來し雪片を惑はせる 同
 木の實植う次の世にその次の世に 神戸 山田弘子
 里山に託す未來や木の實植う 同
 守り継ぐ田畑は重し畦を焼く 同
 初花を点じさゆらぐ枝の先 長岡 安原 葉
 わが猫は恋に聞耳立てしのみ 同
 戸口出ですぐ恋猫に豹変す 同
 花ミモザ風にけぶりて咲かんとす 龍ヶ崎 今橋眞理子
 角曲がりここにもミモザ咲ける家 同
 撒き散らす光のシャワー花ミモザ 同
 活けてある椿の色を数へけり 大阪 塙 告冬
 見えざれど海聞えくる霞より 同
 青空へ模様を置きて春日傘 同
 甲斐信濃かこめる湖に蜩とる 東村山 村松紅花
 春灯下土偶の顔のわれに似て 同
 仏の座かこみ踊子草踊り 同

笑みこらへきれざる雛の口許よ 樞原 稲岡 長
 ひなさまの線のお目より氣品生れ 同
 目を眇め次郎左工門雛戯け 同
 春風が爪先をひつばつてゆく 香川 湯川 雅
 も少しが繰り返されてゐる朝寝 同
 家中が朝寝の中の電話かな 同
 古雛に涙の跡のごときもの 神戸 立村霜衣
 春昼のプラネタリウムてふ夜空 同
 白もまた濃き色として辛夷咲く 同
 寒肥に動き出す庭ありにけり 静岡 須藤常央
 蛇行して消えたる光冬の川 同
 大波の寄するが如し初笑 同
 下萌に地球肥つてをりにけり 東京 橋本くに彦
 羽撃きの予習復習帰る鴨 同
 信念は曲げず極太蝌蚪の紐 同
 色事の親子共演二一の替 神戸 千原叡子
 啓蟄や昼も夜もなき地階の灯 同
 見えてゐて野梅への径ここに尽き 同
 短日の何かと言へば探し物 福岡 松尾緑富
 失せ物の気がかり年の暮てふに 同
 物忘れいよよ激しく年の暮 同
 爽やかに屋敷遺品をすべて寄付 東京 大久保白村
 地虫鳴く被爆跡地の池乾き 同
 露の世や芦屋に諷詠図の下絵 同

雑詠句評（六月号より）

比奈夫・一步・暮潮
弘子・雅　・しげ人
仁義・小木菟・純也
くに彦・昭代・廣太郎

かまくらの中に幼き月の使者 秋田 佐々木ちてき

私たちが楽しんでよく詠む花に「月よりの使者」がある。赤い可愛い小粒の花で、別の名を三時草という。午後三時に花を開くと言われているが、本当は朝から咲いているように思う。でもこの句の月の使者は、幼きとあるから人の子なのであろう。かまくらの中では、折から月に関わる民話か童話の劇が演じられている。主役は勿論月の使者。かまくらの外は明るい雪晴で月が美しい。その月光を纏って月の使者はかまくらの中で畏まっている。

（比奈夫）

秋田県横手市が有名な「かまくら」のイベントは、筆者も一度訪れた事があるが、誠に神秘的な情景である。主役は子供でありその事も何か不思議な情景が繰り広げられているように筆者は思うのである。この「月の使者」とは言い得て妙で、正にこのイベントを余すところなく伝えている。（廣太郎）

狐火を信じ唯物論信じ 河内長野 吉年虹二

狐火とは冬から春先にかけて夜中に山野に見られる所謂怪しい火で鬼火とも燐火ではないかともいわれ、俗説として狐の口から吐く火として現実的なものではないとされているのだが、この作者は冬のある日、実際の物として狐火の連なっている景を見たのである。確かに見たのである。それを敢えて唯物論という堅い言葉を句の中に入れて本当に信じていることを自分にも言い効かせているのである。見たものは見たものとして容認すること、これも俳句の写生ということの一要因である。此の句客観写生句である。（一步）

これだけ科学が発達しても、人間の英知では計り知れない事柄は数多くあり、又全てを科学で説明する事は却ってロマンが無くなってしまふようだ。作者が唯物論者かどうかは判らないが、俳人としてのロマンはしっかり持って「狐火」を詠んでおられるのである。（廣太郎）

天地有情

江戸子選

大虚子の深きこころを讀始む
寒肥をやるねんごろでありにけり
過不足は雪にもありし暮しかな
雪なくて雪解ごころといふも無し
君の過去聞けば寒灯潤みたる
月冴ゆる朝日に主役譲りつつ
旅南下して虚子館にあたゝかし
皆が歩をとめし梅が香はこぶ風
お日和をよろこび憂ひ去年今年
後苑の猪の荒れやう見たくなし
寒さとは透明にして邪心無し
濁世にも芳草萌ゆるてふよろし
春光を波はとろりと解きけり
完訳とひとり呟くシクラメン
万蕾の漲ることも老桜
縷々と継ぐ志あり花は葉に
花多に野梅は枝を差し交し
諧謔も四月一日なればこそ

相模原 木村享史
同
上越 堀前小木菟
同
東京 稲畑廣太郎
同
長岡 安原 葉
同
たつの 浅井青陽子
同
豊中 瀧 青佳
同
神戸 長山あや
同
金沢 藤浦昭代
同
榎原 稲岡 長
同

旧道のさびれたる店年の市
それほどに景気上がらず町師走
花一週遅れさせたる春の冷え
入船も出船も遅々と浦霞む
富士はるか目の前にある緋桃かな
子規の碑や梅咲く崖につつましく
饒舌のとまり公魚ほろ苦し
糶声は人の世のこと桜鯛
黄の記憶また新しくミモザ咲き
三界に水取椿しかとあり
早春の水のうすぎぬ堰越ゆる
鶯や刻印浮かぶ城の石
ゆるゆると来て紅梅に立たれけり
春の山土の匂をのぼりゆく
懸想文買うて祇園をたもとほる
亡き父の小引出より懸想文
春風につめたきときの日向かな
ぶらんこや言ふこときかぬ子の眉目

福岡 松尾緑富
同
千葉 増田善昭
同
松本 唐澤春城
同
八尾 岩垣子鹿
同
神戸 後藤立夫
同
山田 弘子
同
箕面 井上浩一郎
同
東京 大久保白村
同
今井 千鶴子
同

天地有情句評

汀子

お日和をよるこび憂ひ去年今年 たつの 浅井青陽子

新しい年を迎え、暖かい日和を喜ぶが冬の温暖化が心配。

寒さとは透明にして邪心無し 豊中 瀧 青佳

透明な寒さの中にあつて清々しい心持。

完訳とひとり呟くシクラメン 神戸 長山あや

「虚子百句」の翻訳を仕上げてほっとした作者の目にシクラメン

の安らぎ。

万蕾の漲ることも老桜 金沢 藤浦昭代

樹齡の長い桜が万蕾を持った力強さに感動する作者。

花多に野梅は枝を差し交し 樺原 稲岡 長

野梅の咲き溢れた花を支える枝振りに興味を持つ作者。

旧道のさびれたる店年の市 福岡 松尾緑富

開発されて行く町に取り残されたように旧道があり年の市が立

つ。如何にもさびれた店が懐かしい。

大虚子の深きところを読始む 相模原 木村享史

新年になって初めて読む本は偉大なる虚子の心を知るためのものとなった。一年の気概が伝わって来る。

過不足は雪にもありし暮しかな 上越 堀前小木菟

雪を怖れ雪に慣れて生活をする雪国住まい。その雪もその年によって過不足がある。この作者は虚子忌に亡くなられた。

月冴ゆる朝日に主役譲りつつ 東京 稲畑廣太郎

月の冴えた夜も明け早暁の寒さはやがて朝日が昇り一変する。

旅南下して虚子館にあたゝかし 長岡 安原 葉

旅多い作者。日本を南下すると虚子記念文学館がある。季題が

かたる一句。